

仙台市公式訪問団が フランス共和国レンヌ市を訪問

フランス共和国レンヌ市と本市は、昭和42年（1967年）の国際姉妹都市提携から50周年を迎えました。これを記念して、10月18日から23日にかけて、郡市長ら13人の仙台市公式訪問団がレンヌ市を訪れました。

訪問団は、両市の市民交流促進のため、本市の近況報告を兼ねた観光プレゼンテーションを行ったほか、レンヌ市内にある「センドアイ市場」での植樹祭に参加。また、各都市の施策や情報を交換する日仏文化対話に参加し、文化を通し



▲公式レセプションでは、アベレ市長（写真右から2番目）をはじめ、多くの参加者と50周年を祝いました



▶レンヌ市中心部に出版された、仙台や日本に関わるブースも視察

た都市交流の輪を広げました。レンヌ市主催の記念公式レセプションでは、ナタリー・アベレ市長に東日本大震災の際にいただいた支援への感謝をあらためて伝え、両市の交流発展について懇談を行いました。

「杜の都・景観シンポジウム」開催

東北大学片平キャンパスは、歴史的建造物などの保存・活用、新築建物におけるイメージ継承など、景観づくりへの成果などが評価され、平成29年度都市景観大賞「特別賞」を受賞。これを記念し、10月28日、片平キャンパス内で「杜の都・景観シンポジウム」を開催しました。

シンポジウムでは、建物の歴史の説明を聞きながらキャンパス内を見学するツアーや、片平キャンパスの建物の魅力、これまでの取り組み、今後の保存活用などについての講演等を実施。参加者の皆さんは、片平キャンパスの優れた景観にあらためて触れ、今後の展望などについて考えました。

「GREEN LOOP SENDAI」開催

10月14日・15日の2日間、定禅寺通、西公園、錦町公園を会場に、「GREEN LOOP SENDAI」が開催されました。これは、地域活力の向上を目指し市が推進する「せんだいリノベーションまちづくり」から生まれた取り組みで、公共空間の活用を目的に民間主導で開催されたイベントです。秋空の下、コーヒーやパン等を販売する約130の店舗が軒を連ね、延べ3万人以上の人々が食べ歩きや散策をしながら、緑地帯や公園の新しい魅力を満喫しました。



▲コーヒーなどの飲み比べもでき、連日にぎわいを見せていました

「ごみ減量キャラバン2017」を実施

10月10日から11月10日まで、家庭ごみの減量を目指すキャンペーン



▲ごみ袋を目視し、資源物混入の有無をチェックしました

「WAKE UP!! 仙台・ごみ減量キャラバン2017」を実施しました。

期間中は、地域で環境美化に取り組む「クリーン仙台推進員」と市職員が、市内約500カ所のごみ集積所でごみの排出状況を確認。また、今回は、東北福祉大学と連携して大学生が多く住む地域で啓発活動を行ったり、不動産管理会社と連携して集合住宅の集積所で調査をしたりするなど、初の取り組みも行いました。市では今後も、地域住民や事業者、大学等と連携し、ごみ減量とリサイクル推進の取り組みを図っていきます。

平成29年度の家ごみ排出量は、昨年度と比べ増えており、特に、プラスチック製容器包装の混入割合が増加しています。ごみ減量と資源物分別の推進に、市民の皆さんの一層のご理解とご協力をお願いします。



▲景観とともに音楽を楽しめるコンサートも開催されました

優れた技能と長年の功績をたたえて 技能功労者表彰

市では、長年にわたり優れた技能で市民の生活を支え、仙台のまちづくりの基礎を築いてきた技能職の方々に技能功労者として毎年表彰しています。

11月13日に仙台市技能功労者表彰式が行われ、28職種41人の方々に表彰しました。受賞者の方々は次のとおりです（順不同・敬称略）。

- 〔石工〕平賀誠（印刷製本職）
- 畠山久良、相澤俊之、鴨井克博、中村充（印章彫刻職）
- 大島登志（屋外広告美術職）
- 鈴木健（菓子製造職）
- 伊藤市子（ガラス職）
- 長谷川欣市（クリーニング師）
- 横山泰治（左官職）
- 伊藤進（写真師）
- 阿部貴彦（鍼灸マッサージ師）
- 山田幹夫（寝具製作職）
- 泉吉郎（造園職）
- 石出慎一郎、小島英則（染師）
- 小西晴夫（大工職）
- 遠藤正典、田中正夫、森信夫、齋藤明

英語版震災復興記録誌を発行しました

東日本大震災からの本市の復興状況と、復興に当たって発揮された市民の力を広く世界に発信するため、英語版震災復興記録誌「Road to Recovery SENDAI」を発行しました。この記録誌は、3月に発行された「東日本大震災 仙台復興のあゆみ」を再編集し、英語に翻訳したものです。市役所本庁舎1階市政情報センターなどで配布しているほか、市ホームページでもご覧いただけます。



▲11月に開催された世界防災フォーラムでも活用

3.11 震災文庫を 読む部

「16歳の語り部」



著者 那由多、津田乃果、相澤未音 / 語り部 佐藤敏郎 / 監修 波プラ社 刊

この本は、震災から5年目の年に出版されました。被災時、宮城県東松島市の小学校5年生だった3人の子も達が、当時を、そして5年の歳月を語りました。この時彼らは高校1年生。「生きることは苦しいけど、苦しいことばかりではないです。私は今日も、親友の分まで生きていきます」「一日ひとつ、何でもいらいら思い出を作ってほしい」など、一つ一つの言葉が、自分と向き合うことの大切さを教えてくれます。

こうして語るまでに、5年の歳月が必要だったという彼らの等身大の語りは、読み手の心に、それぞれに必要なメッセージが届けることでしょう。

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

言葉、未来への贈り物 フリーアナウンサー 渡辺 祥子



著者 渡辺祥子 / TOブックス刊

「言葉はその人の在り方そのものを現し、その人の引き受けた事柄すべてを現す」ことを、被災地で懸命に生きる方々が教えてくれました。

混乱の中でも、ユーモアをもって周囲の人々の心を和ませた人の言葉や、どんな困難であろうとも目の前にあることが私の人生だと、全てを受け入れて前に進む人の言葉など、数々の言葉（その人そのもの）に出会うたびに、私は生きる力を受け取り、別の誰かにも伝えなければと強く思うようになりました。震災から3年の間に出会った人たちの言葉を、「未来を生きる人たちの教科書になる」との思いでまとめた拙著です。

※紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・15885